



戦艦陸奥の錨と鎖

第一次世界大戦終了後、大正9年（1920年）まだ脆弱だった海運・造船業は大打撃を受け、株価は暴落し金融恐慌に陥った。その痛手から立

鉄のふしぎ？ 博物館

64

「大阪製鎖所 鑄鋼錨鎖」



戦艦大和の錨と鎖



現在の自衛艦

衣川製鎖工業・衣川良介社長

画像はカラーと交換しています。

ちなおれない日本を、昭和4年（1929年）、世界大恐慌が直撃。世界的な不況のため、世界の強国は経済のブロック化をはかり、日本の経済進出をおさえた。そこで日本政府は、軍需産業の自立を推進するとともに、不況の脱出口を大陸進出にもとめ、満州などへの開拓移民をすすめた。こうした政策は、軍部の発言力をしだいに強め、軍国主義の台頭をもたらすこ

大阪製鎖所には、再び商船および海軍



ニッケルコイン

一般景気の立ち直りと「船舶改善助成措置」によって、造船業も以後、急速に回復。新造船建造高は、昭和2年に4万総トンまで落ち込んでいたものが、11年は25万総トン、12年には43万総トンと急伸。日本は、昭和8年2月国際連盟を脱退、翌9年12月ワシントン海軍軍縮条約を破棄し、海軍力の増強に着手したため、艦艇の建造もにわかに活発になった。

を呈した。昭和7年、大阪製鎖所は「鑄鋼錨鎖」の試作に成功、それまで錨鎖は「鍛接錨鎖」で、その材料は英・ヒンクレー社製の錬鉄丸棒であった。大阪製鎖所は、大正14年（1925）、1ト電気炉を新設、以来、海軍と協力し、鑄鋼錨鎖の研究を進めてきた。この研究の努力が実を結び、すぐれた鑄鋼錨鎖の試作に成功、厳密な試験の結果、その優秀性が確認され、これが正式に海軍艦艇用に採用された。

大阪製鎖所では、60ト錨鎖牽引試験機を新設、鑄鋼工場に5ト電気炉を増設するとともに、元呉海軍工廠製鋼部長田中寛少将を技師長に迎

【余談】

ニッケルコイン

昭和8・12年、十銭（直径22ミ、量目4・02ギ）と五銭（直径19ミ、量目2・80ギ）がニッケルコインです。偽金が行ったことから偽金対策として、製造技術の高度な硬貨にするというのが外国からニッケルを輸入する口実ですが、本音は合金元素の確保だったのです。昭和6年に満州事変が勃発し、兵器類に必要な特殊鋼に使う合金元素として不可欠なニ

え、鑄鋼錨鎖の製造を本格化していった。こうして海軍艦艇用はもちろん、大型商船用も、以後大阪製鎖所の鑄鋼錨鎖の独壇場となり、戦時中の海軍軍備の拡張、一般船腹の増強に大きく貢献していくのである。これがその後の大阪製鎖所の事業拡大、業績向上につながっていったことはいまでもない。

【参考資料】

▽産業フロンティア物語 鑄鋼鎖・歯車（大阪製鎖造機×ダイヤモンド社昭和44年3月初版発行）